

ねん がつ にち
2023年6月18日

ねんかんたい しゅじつ
年間第11主日

きくち いさおだい しきよう
菊地 功大司教 メッセージ

しゅうかく おお はたら て すく
「収穫は多いが、働き手が少ない」

ゆた みの しゅうかく ひと た はたら て
豊かに実っているにもかかわらず、それを収穫する人が足りない。だから働き手をさ
らに必要なのだ。そのように理解すると、例えば日本での福音宣教の厳しい現実を目の当
たりにして、一体どこにその豊かな実りがあるのだろうかと問いかけてしまいます。

ことば この言葉は、それよりももっと根本のところを問いかけています。つまり神の国の完成
のためには、神が求められるこの地上ですべきこと、しなければならないことは山積
しており、それに取り組むための働き手をもっと必要なのだという意味でしょう。加え
て、この言葉は単に、司祭の召命の必要性だけを説いているものでもありません。もち
ろん司祭は必要です。しかし同時に、神の国の完成のために働くのは、一人司祭だけで
はありません。すべてのキリスト者には、それぞれの場で、それぞれに与えられた才能
に従って、「働き手」となることが求められています。

しゅご じしん はたら て さいしよ えら にん で し けつ みな おな ひと
主御自身が「働き手」として最初に選ばれた12人の弟子たちも、決して皆が同じような人
だったのではなく、様々な性格、様々な才能、様々な思いを持った異なった人たちであ
りました。まさしく多様性のうちにある人々です。その多様性ある共同体は、「天の国
は近づいた」と告知する使命によって一致していました。それぞれが、それぞれに与え
られた才能を生かし、異なる方法で、しかし同じ務めを果たすことで、多様性における一致
が、弟子たちの共同体に実現し、あかしされていきました。同じように、現代社会に生
きる教会共同体は、一つの体を形作る一人一人が、それぞれに与えられた才能を生
かし、それぞれに異なる方法で、しかしキリストの福音を告げ知らせるのだという同じ思
いによって結ばれるとき、多様性における一致が実現します。

きょうこう かいちよく きょうだい しる
教皇フランシスコは回勅「兄弟のみなさん」に、こう記しています。

「いのちがあるのは、きずな、^{まじ}交わり、^{きょうだいあい}兄弟愛のあるところです。・・・それとは^{ぎやく}逆に、
^{じぶん}自分は^{じぶん}自分にのみ^{きぞく}帰属し、^{ことう}孤島のように^い生きているのだとうぬぼれるなら、そこにいの
ちはありません (87)」

わたしたちの^め目の^{まえ}前には、^{かみ}神の^{くに}国の^{かんせい}完成のためにしなければならぬことが^{ひろ}広がって
います。^{はたら}働き手はわたしたちです。わたしたちは^{きょうどうたい}共同体の^{いつち}一致の^{きずな}絆のうちに、その^{つと}務め
を果たしていきます。なぜならば^{からだ}キリストの^{きょうどうたい}体である^{きょうどうたい}共同体にこそ、いのちがあるか
らです。^{きょうどうたい}共同体の^{きずな}絆、^{まじ}交わり、^{きょうだいあい}兄弟愛に、わたしたちを^い生かす^{みなもと}源であるいのちがあ
ります。^{ひとり}一人では「^{はたら}働き手」の^{つと}務めを^は果たすことはできません。ともに^{たす}助け合いながら、^{たが}互
いの^{きずな}絆を^{ふか}深め、それぞれに^{あた}与えられた^{さいのう}才能に^{もと}基づいて、^{しやかい}社会の中で「^{はたら}働き手」として、
^{しゆうかく}収穫の^{ごう}業、^{ふくいん}すなわち福音の^{つと}あかしに^{まい}努めて参りましょう。